

桜の風

日芸文芸楊々三

岡嶋
晴香

携帯の着信音に、ただため息をつくしかなかった。ディスプレイに表示された一文字の漢字は、見慣れたを通り越してゲシュタルト崩壊でも起こしそうな勢いだ。けれどここで電話を無視した場合あとが面倒なものを経験済みである俺は、またひとつため息を零しながら携帯を手を取った。

「はい、もしも」

「ああ、良かった。元気にしちよる？ ご飯はちゃんと食べよる？」

俺の声すら確認する前に、電話口から雪崩込むように定型文が押し込められる。

「……あのさあ、そう毎日毎日電話掛けなくていいんだけど」

「なんね？ なんでお母さんにそんげ標準語で話しちよるん？」

「なんでもいいだろ！」

数日前、母と電話をしたあと、友人に対して方言のまま話していることに気が付かなかったことが脳裏にぎり、思わず声を荒らげた。それを馬鹿にするような友人ではなかったが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

「とにかく、元気だし飯は食ってる。ちゃんと洗濯はしてるし学校も寝坊してない。はい、もういいだろ」

「なんね？ お母さんはあんたんこと心配して電話しちよるっちゃが。あんたは昔からだしがなかったかい、

また何かやかかしちよるんじゃねえかって……」

「それが大きなお世話だつて言いよるっちゃね！ もう電話してこんで！」

「あつ、ちよつと待たんね」

慌てた母の声を遮るように、ディスプレイに浮かぶ赤いボタンを叩く。それでも苛立ちは収まらず、短い暴言とともに携帯を投げ捨てると、ドン、と薄い壁が抗議の声を上げた。ビクリと体を固めると、部屋には打って変わって静寂が広まる。

いまだに慣れないその静寂に胸の中でむくりと何かが顔を上げたが、あつという間に苛立ちにすぐ替わっていた。何となくじつとしていられず、投げ捨てた携帯と財布を掴む。

鍵の施錠音が普段よりやたらと大きく響いたような気がした。その音に呼吸が一瞬止まったが隣の扉が開くことは無かったのでホッと肩を下ろす。その肩を、薄い布越しに夜風が撫で去った。

「……しまった、上着を忘れた」

昼間と寒暖差が大きくなるこの時期特有の、乾いた甘い香りの風。けれどまだその風に昼間の包むような暖かみは少なく、少し体を縮こませる。だがどうにも再び鍵を開けて上着を取りに行く気にはなれない。どうせすぐそこまでだから、と腕を擦りながら歩き出した。

こういう時、自分の地元近くと都会の違いをまざまざと感じる。歩いて行ける範囲に、夜十時を過ぎても営業しているコンビニがあるなんて、なんて素敵なことだろう。

さすがにコンビニはあったが、街灯がポツポツとしかない山道をしばらく下って街に出なければなかった。家の近場には、営業しているのかしていないのか分からない酒屋くらいしかなかった辺鄙な土地から出てきた身としては、異世界にでも出たような気分である。

やたらと明るい、けれど人の気配が薄い住宅街を抜けていく。数度、間違った曲がり角を曲がりかけながらも、煌々と光る四角い箱廂り着き、その中へと吸い込まれた。こんな時期なのだし、こうも明るい虫が集まりそうだと思うたが、どうやら都会にはそんなにいないらしい。一匹の小さな蛾が窓にへばりついていただけだった。

何となしに雑誌コーナーへまず足を向けた。こうして見知らぬ人と窓に向かって並ぶ光景は、まるでドラマか漫画のワンシーンのようでまだ少しドキドキする。棚に乱雑に並んだ物たちを物色するが、やたらとピンク色の華やかな表紙が多いことに気付いた。やたらと明るいせらに、一気に手を伸ばす気をなくした。

仕方なくふらふらと店内を彷徨く。先ほど苛立ちとすげ替わった何かが、またむくりと頭を出した気がする。けれど部屋にいた時よりはまた小さい。その事に無意識に安心したように息をついて、何となくそれにも苛立

った。

店の中央に集められた、華やかな色のパッケージのひとつに手を伸ばす。期間限定、とでかか書かれたスナック菓子を幾つか適当に見繕ってカゴの中へ放り込む。別段気が惹かれた訳では無いが、手ぶらで帰るのもなんだか癪だった。

そのままレジに向かうと、真新しい糊のついたセーラー服を着た少女がレジ前に居た。自身の足元には黒い楽器ケースのようなものが置かれている。それもまた真新しい。

どうしてこんな時間に、と思っていると、文具類を買い求めていたようだ。少女は会計を済ませると大きな黒いケースを背負い直して、少し急いだ様子で出口へと向かった。何となしに目で追っていた先にある、もうひとつのレジにいる女性と偶然目が合った。

「あっ」

慌てて目を逸らそうとした俺に、見知った声が小さく届いた。

「あれ、すごい偶然」

その声と共にパタパタと軽い足音が近付く。改めて顔を上げれば、最近知った顔があった。

「どうしたの？ あっ、そういえば家大学の近くって言ってたね」

この辺だったんだあと彼女は楽しそうに微笑んだ。俺は曖昧に笑ったあと、ああと、無意味な言葉を零し。「何となく、食べたくなつたんですよ」

と、カゴに入れた商品を見せた。彼女は首を伸ばしてそれらを見たあと、なるほどねと言わんばかりに頷く。「この季節、その味の商品いっぱいあるもんね。買うもんかつて最初は思っただけど、ついつい期間限定とか言われると買っちゃうんだよね」

「ああ、わかります。俺も、まあ、目に入つて思わず買っちゃった口なんです」

そこで目の前の店員が、あの、と困つたように声を掛けた。彼女が隣で「あつ」と小さく声を上げたあと申し訳なきように俺を見上げる。

「引き止めちゃつてごめんね、お会計前だったね」

「いえ、いいんです。こちらこそなんかすみません」

そう言いながらレジにカゴを置くと、何故か彼女も隣に立った。

「あの、先輩？」

「ん？ 可愛い先輩だし、奢ってあげようと思つて」

「えっ、いいですよそんなの」

「いいのいいの、私がただ浮かれてるだけだから」

先輩と接するの久しぶりでさ、と少し照れたように笑った。どうしたものかと逡巡したが、あとで一つ先輩にお菓子をお裾分けすれば良いかと決着をつけた。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「任せて」

と、胸を張りながらさっさと千円札と小銭を数枚出してしまふ。何となく居心地悪く感じながら、体を小さくして彼女の後ろで立ち尽くした。

「意外と家近いんだね」

先輩と肩を並べながら静かな住宅街を歩いた。やっぱり上着無しじゃまだ薄っすらと寒い上に風も少し吹いている。彼女は、パステルカラーのロングスカートと、落ち着いた色の上着を翻している。さっきお菓子のお裾分けを提案したら、ダイエット中だから一人で食べてと断られてしまい、俺の手元の袋にはたくさんのお菓子がぶら下がっていた。先輩細いじゃないですか、という言葉は飲み込んだ。

「そうですね」

「まだここに越してきて一ヶ月くらい、だよ。安いスーパーとか教えてあげるよ」

「本当に助かります。知り合い居なくてどうしようって思ってたんですけど、先輩いるなら安心です」

「ああ、わかる。地元から出たら知り合い一人も居ないからさあ、寂しくて寂しくて」

「寂しい……ですか」

「うん、お母さんからの連絡とか、絶対実家いた時は鬱陶しかったのにその時は嬉しくてさあ」

「そんなもんですかね」

何となくさっきの母親との電話のやり取りを思い出した。ついでにむくむくと顔を上げた苛立ちも。

彼女は暫くじつと俺の顔を見たあと、小さく首をかしげた。

「あれ、嬉しくない感じ？」

「毎日のように電話かけられたら、別に……」

「ああ」

彼女はくすりと小さく笑う。

「まあ、確かにね。……私も、最初は鬱陶しいから辞めろって喧嘩しちゃったんだけど」

「えっ」

「いざ来なくなったら、本当に、なんて言うのかな」

彼女はううん、と小さく唸ったあと、またふっと小さく笑った。目が少し伏せられる。

「なんかね、部屋の静かさが嫌に目立って。あんまり家に居たく無くなっちゃったんだよね」

どきりと大きな動悸がした。頭を上げていた何かが、苛立ちという皮を突き破る余震を胸の中で起こす。吹き出した汗を夜風が攫った。思わず足を止めた俺を、三歩先で彼女が振り返る。

「あれっ、どうしたの」

「いえ、別に何も……」

「そう？」

彼女は不思議そうに小首を傾げた。のろのろと再び動きだした俺を眺めながら、また肩を並べて歩き出す。彼女はひとつ声を小さくして、でも、と続けた。目を伏せた横顔に深く影が降りる。

「でも私が電話しないですって言い出した手前、なかなか電話できなくてさあ」

「そう、なんですか」

「ギリギリまで我慢したけど。でも結局、私が電話嫌って言ったのに、寂しいって泣きついちゃって」

不意に沈黙が流れたあと、彼女は両手でがばっと少し大袈裟に顔を隠した。

「ああ恥ずかしいな、ほかの一年生には秘密にしてね」

またいつもの声に戻った彼女に、僕は戸惑いながらも答えた。

「えっ、いや、言いませんよ」

「出来のいい後輩で私は嬉しいよ」

そして悪戯っぽく笑うと、じゃあ私こっちだから、と角を曲がっていく。その後ろ姿をぼんやりと眺めていると、彼女は不意に振り返った。夜の迷惑にならない程度の声量で。

「だから、お母さんには素直に謝った方がいいよ。意固地になればなるほど言いにくくなるから、早めに、ね」

「えっ、なんでそれを」

彼女はぱちりとひとつウインクをすると、今度はさっさと背を向けて歩き始めてしまった。呆然と立ち尽くす僕のポケットの中で、小さく携帯が振動した。

起動されたSNSの通知欄に、母、という見慣れたを通り越して、ゲシュタルト崩壊でもしそうな漢字一文字が表示される。その名前の下に一言、もう電話しないごめん、と表示されていた。

俺はそのメッセージを三回読み直したあと、ふと沈黙した新しい自身の城を思い出した。俺の好きな物で溢れて、自由な、冷たい静かなお城。帰る、という感覚がまだしっくりしない、自分の家。

さらりとまた冷たい風が吹いた。先ほど買い漁った期間限定味の匂いがする。

それにつられたように、むくりと胸の中で殻を破った何かが顔を上げた。自然と指が返信をしていた。

『俺も、ごめん。電話していい』

彼女の横顔が頭をよぎる。寂しくて。その言葉が繰り返し響く。寂しくて、寂しくて。

胸の中で寂しさが、不安定に立ち上がった。今度こそはつきりと、何かにすげ替わることなく。

『でも、毎日はやめて』

プライドによるささやかな抵抗であるその一言を付け足した。